

平成29年度 A6二

6 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ここまでのあらずじ」 「自分」は、眠って夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

運慶は見物人の評判には委細顧着なく鑿と槌を動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のようなものを乗せて、素袍だか何だか別らない大きな袖を背中で括っている。その様子がいかにも古くさい。わいわい言ってる見物人とはまるで釣り合いがとれないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかと思つた。どうも不思議なことがあるものだと思えながら、やはり立って見ていた。

しかし運慶のほうでは不思議とも奇体とも感じ得ない様子で一生懸命に彫っている。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分のほうを振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なした。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。あつぱれだ」と言つて賞めだした。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男のほうを見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している」と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がってきた。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使つて、思うような眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独り言のように言つた。するとさっきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違うはずはない」と言つた。

自分はこの時はじめて彫刻とはそんなものかと思ひだした。はたしてそうなら誰にでも出来ることだと思ひだした。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさっそく家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、せんだつての暴風で倒れた檜を、薪にするつもりで、木挽に挽かせた手順なやつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫りはじめてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のにも運悪く掘り当ることが出来なかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片っ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかつた。



参考

(夏目漱石「夢十夜」による。)

(注1) 委細顧着なく 細かいことを気にしない。

(注2) 不思議とも奇体とも 不思議であるとも奇妙であるとも。

(注3) 大自在の妙境 少しの束縛もなく、自由な境地。

(注4) 堅に返すや否や斜に 縦に返すとすぐに斜めに。

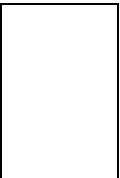
(注5) 木挽に挽かせた 製材することを仕事にしている人に切らせた。

※ 問題は、次のページに続きます。

二——線部「どれもこれも仁王を威^かしているのはなかった」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 木挽が隠した仁王を見付けられなかった。
- 2 木が堅くて鑿では仁王を掘り出せなかった。
- 3 薪が小さすぎて仁王が入っていなかった。
- 4 仁王を彫刻することはできなかった。

解答らん



平成29年度 A6二

6 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

「ここまでのあらずじ」「自分」は、眠って夢を見ている。夢の中にいる「自分」は、運慶の評判を聞き、運慶の仕事ぶりを見に行く。

運慶は見物人の評判には委細顧着なく鑿と槌を動かしている。いつこう振り向きもしない。高い所に乗って、仁王の顔の辺をしきりに彫り抜いて行く。

運慶は頭に小さい烏帽子のようなものを乗せて、素袍だか何だか別らない大きな袖を背中括括している。その様子がいかにも古くさい。わいわい言ってる見物人とはまるで釣り合いがとれないようである。自分はどうして今時分まで運慶が生きているのかと思つた。どうも不思議なことがあるものだと考えながら、やはり立って見ていた。

しかし運慶のほうでは不思議とも奇体とも感じ得ない様子で一生懸命に彫っている。仰向いてこの態度を眺めていた一人の若い男が、自分のほうを振り向いて、

「さすがは運慶だな。眼中に我々なした。天下の英雄はただ仁王と我とあるのみという態度だ。あつぱれだ」と言つて賞めだした。

自分はこの言葉を面白いと思つた。それでちよつと若い男のほうを見ると、若い男は、すかさず、

「あの鑿と槌の使い方を見たまえ。大自在の妙境に達している」と言つた。

運慶は今太い眉を一寸の高さに横へ彫り抜いて、鑿の歯を堅に返すや否や斜に、上から槌を打ち下ろした。堅い木を一刻みに削つて、厚い木屑が槌の声に應じて飛んだと思つたら、小鼻のおつ開いた怒り鼻の側面がたちまち浮き上がってきた。その刀の入れ方がいかにも無遠慮であつた。そうして少しも疑念を挟んでおらんように見えた。

「よくああ無造作に鑿を使つて、思うような眉や鼻が出来るものだな」と自分はあんまり感心したから独り言のように言つた。するとさっきの若い男が、

「なに、あれは眉や鼻を鑿で作るんじゃない。あのとおりの眉や鼻が木の中に埋まっているのを、鑿と槌の力で掘り出すまでだ。まるで土の中から石を掘り出すようなものだから決して間違うはずはない」と言つた。

自分はこの時はじめて彫刻とはそんなものかと思ひだした。はたしてそうなら誰にでも出来ることだと思ひだした。それで急に自分も仁王が彫つてみたくなつたから見物をやめてさっそく家へ帰つた。

道具箱から鑿と金槌を持ち出して、裏へ出てみると、せんだつての暴風で倒れた檜を、薪にするつもりで、木挽に挽かせた手頃なやつが、たくさん積んであつた。

自分は一番大きいのを選んで、勢いよく彫りはじめてみたが、不幸にして、仁王は見当らなかつた。その次のにも運悪く掘り当ることが出来なかつた。三番目のにも仁王はいなかつた。自分は積んである薪を片っ端から彫つてみたが、どれもこれも仁王を蔵しているのはなかつた。

(夏目漱石「夢十夜」による。)

(注1) 委細顧着なく細かいことを気にしない。

(注2) 不思議とも奇体とも不思議であるとも奇妙であるとも。

(注3) 大自在の妙境少しの束縛もなく、自由な境地。

(注4) 堅に返すや否や斜に縦に返すとすぐに斜めに。

(注5) 木挽に挽かせた製材することを仕事にしている人に切らせた。



参考

※ 問題は、次のページに続きます。

二——線部「どれもこれも仁王を威^かしているのはなかった」とありますが、この部分の意味として最も適切なものを、次の1から4までの中から一つ選びなさい。

- 1 木挽が隠した仁王を見付けられなかった。
- 2 木が堅くて鑿では仁王を掘り出せなかった。
- 3 薪が小さすぎて仁王が入っていなかった。
- 4 仁王を彫刻することはできなかった。

解答らん

4